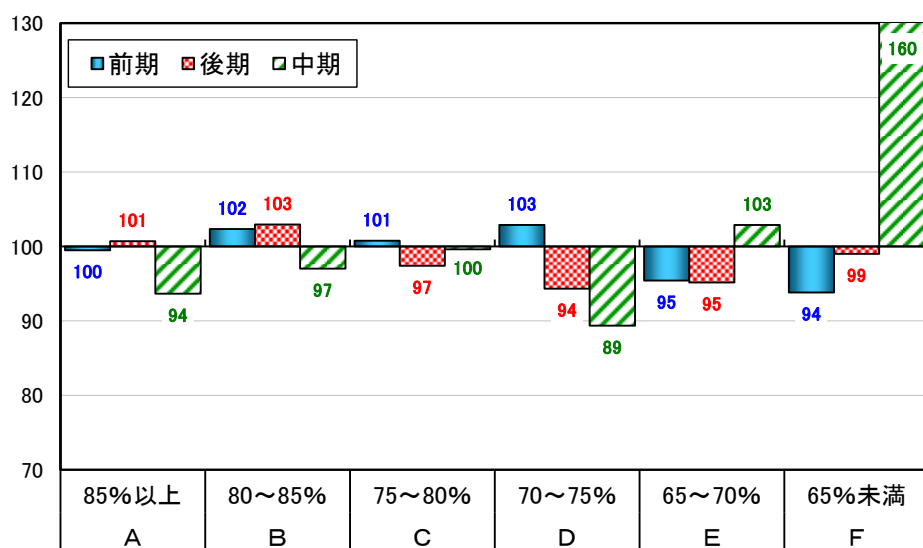


※本文内の（ ）内の数値は志願者数の前年度確定数との対比指数を表します。

◎共通テスト目標ライン別志願者数集計

□前期はDグループがやや増加、後期はBグループがやや増加



左記のグラフは、2023 年度のデータネット(駿台予備学校/ベネッセコーポレーション主催、共通テスト自己採点集計)において、募集単位ごとに設定された合格目標ライン(B判定ライン、合格可能性 60%)を基にして、大学・学部(医学部医学科は学科)単位で得点率により 6つのグループ分けを行い、日程別に各グループの志願者数の増減を前年度対比指数で示したものです。

前期全体では(99)の微減ですが、Dグループがやや増加し、E・Fグループがやや減少しています。A・B・Cグループは前年度並となりました。共通テストの平均点アップにより、E・Fグループへの出願が控えられ、強気の出願だったことがうかがえます。

グループごとに詳しく見ていきます。

Aグループは136人(100)の微減で前年度並でした。大学・学部別集計で100人以上増加したのは東京芸術大・美術、岐阜大・医(医)、名古屋大・医(医)で、特に医学部医学科への高い人気が見られました。一方で、100人以上減少したのは、岡山大・医(医)、広島大・医(医)、東京外国語大・言語文化、東京大・理科一類でした。前年度の反動や外国語系統への低い人気が見られました。

Bグループは872人(102)の微増でした。大学・学部別集計で200人以上増加したのが大阪大・基礎工、浜松医科大・医(医)、島根大・医(医)、鳥取大・医(医)、富山大・医(医)でした。一方で、200人以上減少したのが香川大・医(医)で、増加大学・学部が目立ちました。

Cグループは310人(101)の微増でした。大学・学部別集計で200人以上増加したのは、横浜国立大・経済、横浜国立大・理工、金沢大・理系一括、福島県立医科大・医(医)でした。一方で、200人以上減少したのは電気通信大・情報理工で、減少大学・学部が目立ちました。

Dグループは1,042人(103)のやや増加でした。大学・学部別集計で200人以上増加したのは、名古屋工業大・工、高崎経済大・地域政策、東京農工大・工、広島大・工、大阪公立大・経済でした。一方で、200人以上減少したのは、滋賀大・経済、静岡大・人文社会科学、会津大・コンピュータ理工、高知工科大・経済マネジメントとBグループ同様に増加大学・学部が目立ちました。

Eグループは1,664人(95)のやや減少でした。大学・学部別集計で200人以上増加したのは、山口大・教育、静岡大・工、静岡大・理でした。一方で、200人以上減少したのは、弘前大・医(保健)、富山県立大・工、岐阜大・工、三重大・工とCグループと同様に減少大学・学部が目立ちました。

Fグループは3,560人(94)のやや減少でした。大学・学部別集計200人以上増加したのは、山口大・工、前橋工科大・工、山陽小野田市立山口東京理科大・工、新見公立大・健康科学と地方公立大の理系学部が多くなりました。一方で、200人以上減少したのは徳島大・総合科学、大分大・理工、鳥取大・工、秋田県立大・シ

STEM科学、高知大・理工、山形大・工、香川大・創造工、長崎県立大・地域創造、島根県立大・人間文化、北見工業大・工、徳島大・理工で、地方国立大の理工系学部が多くなりました。このように、Fグループでは減少大学・学部が目立ちました。

後期全体では(98)の微減ですが、Aグループ(101)は微増、Bグループは(103)のやや増加、一方でCグループ～Fグループは減少傾向で、強気の出願だったことがうかがえます。

グループごとに詳しく見ていきます。Aグループは194人(100)の微増で前年度並でした。大学・学部別集計で300人以上増加したのは宮崎大・医(医)、琉球大・医(医)、旭川医科大・医(医)といずれも医学部医学科でした。一方で、300人以上減少したのは東京外国語大・国際社会、奈良県立医科大・医(医)で、系統への低い人気や反動による減少が要因でした。

Bグループは730人(103)のやや増加でした。大学・学部別集計で200人以上増加したのは横浜国立大・経済、名古屋工業大・工でした。一方で、200人以上減少したのは、京都工芸繊維大・工芸科学、富山大・理でした。特に、横浜国立大・経済の700人増加がグループ全体のやや増加に繋がりました。

Cグループは697人(97)のやや減少でした。大学・学部別集計で200人以上増加したのは高崎経済大・地域政策、埼玉大・工、三重大・工、三重大・生物資源でした。一方で、200人以上減少したのは電気通信大・情報理工、静岡文化芸術大・文化政策、富山大・経済で、減少大学・学部が目立ちました。

Dグループは1,900人(94)のやや減少でした。大学・学部別集計で200人以上増加したのは静岡大・工、山口大・人文でした。一方で、200人以上減少したのは岐阜大・工、福井大・工、岩手大・理工、茨城大・工、岡山大・法とCグループと同様に減少大学・学部が目立ちました。

Eグループは1,471人(95)のやや減少でした。大学・学部別集計で200人以上増加したのは山口大・工、滋賀大・教育、兵庫県立大・工でした。一方で、200人以上減少したのは徳島大・理工、鳥取大・地域、広島市立大・情報科学でした。なお、新設・廃止を除いた100人以上減少した大学・学部数が100人以上増加した大学・学部数の2倍余りだったことがグループ全体の減少に繋がりました。

Fグループは201人(99)の微減で前年度並でした。大学・学部別集計で200人以上増加したのは室蘭工業大・理工、福島大・理工でした。一方で、200人以上減少したのは北見工業大・工、岩手県立大・総合政策、徳島大・総合科学でした。

公立大のみの中期は、Fグループ(160)で激増しましたが、新規の周南公立大を除くと(111)の増加でした。目標ラインの高いA～Dグループは減少傾向でした。前期および後期との間で自由に併願が可能な中期では、比較的難易度が低い大学・学部志願者が集まりました。共通テストの平均点アップの中で、中期では安全校としての出願傾向が見られました。なお、中期はもともと対象大学が少なく募集人員も少ないため、特定大学に志願者が集中しやすく指数が大きく変化する傾向があることから、あくまでも参考としてください。